

平成24年度 男女共同参画推進月間講演会

被災地からのメッセージ

～なぜ防災・復興・減災に女性の視点が必要か～



日時 平成24年6月17日(日) 13:30～15:30

会場 こうち男女共同参画センター 3階大会議室

講師 宗片恵美子(NPO法人イコールネット仙台 代表理事)

- 特定非営利活動法人イコールネット仙台 代表理事
- 男女共同参画社会の実現に向け幅広く取り組むとともに、男女共同参画を核としたネットワーク形成を目指し活動を行っている。仙台市男女共同参画推進センター「エル・パーク仙台」市民活動スペースの受託団体として運営管理を担当。
- 2008年、仙台市内の女性を対象に「災害時における女性のニーズ調査」を実施し、「女性の視点からみる防災・災害復興対策に関する提言」をまとめた。
- 2010年より、中央防災会議「地方都市等における地震防災のあり方に関する専門調査会」委員
- 2011年6月 内閣府より、男女共同参画に関する「女性のチャレンジ賞」を受賞。



★災害時における女性のニーズ調査

私たちの団体は、男女共同参画をテーマに幅広い活動に取り組んでいる団体です。2008年に、仙台市内の女性約1,100人を対象に災害時における女性のニーズ調査を実施しました。東海地震・東南海地震の確率が大変高いと言われているこちらの地域で、今回の私たちの震災の経験、体験が少しでもお役に立てればと思います。

95年に発生した阪神・淡路大震災では、男性よりも女性の死亡者が1,000人多く、その1,000人は圧倒的にひとり暮らしの高齢の女性でした。避難所では、女性たちはさまざまな困難やストレスを抱えたということが数々の側面から言われてきました。そして、震災解雇。職場が被災をしたことで、アルバイトやパート、派遣などで働いて

いた女性たちが真っ先に解雇の対象となったという、これは今回の東北の被災地でも数多く見られる現象でもあります。それから、DVの増加。男性たちもさまざまなストレスを抱え、それが家庭の中で妻や子どもに向かい、そういった相談が数多く寄せられたわけなのです。その他数々の女性たちが抱えた困難、震災に伴う困難というものが明らかになっていました。

★被災直後

3月11日の被災直後は、ライフラインがストップし、電気も止まっていました。それから、余震がずっと続き、雪が降りとても寒かったです。避難所に指定されている学校の体育館には、200人、300人しか入れないところに1,000人単位で避難をしてきました。そのため、立ったままで、横になることもできず、ただ周りに誰かがいるということでの安心感だけでした。

そういった状況で、トイレが男女別だとか何とか言っている暇はありません。仮設トイレも、ほとんど布が1枚ぶら下がっているような状況で用を足すところが見えてしまうというような、それでもとにかくないよりはあった方がいいという状態でした。毛布も1枚渡されればいい方で、とにかく冷たい床に横になれる人は横になって何とかその時間を過ごすという状態でした。

だんだんにライフラインも回復し、自宅に戻れる方は戻り、津波によって自宅が被災して全く住めない状態の方や、内陸部でも地割れや地盤沈下で家が傾いて住むことができないといった方たちの避難所生活が始まり、仙台市の場合は4カ月にわたって続きました。これは大変過酷な生活でした。

★せんとくネット始動

学校の体育館には洗濯機もなく、設置するためには電源と、排水設備のため下水工事もしなければなりません。約1カ月たってせいぜい3～4台の洗濯機や乾燥機が設置されましたが、その間は全く洗濯ができませんでした。

そこで、せんだい男女共同参画財団と私たちの団体が連携をし、「せんとくネット」の活動を始めました。仙台（せんだい）の女性たちが、被災した女性の本音をたくさんくみ取って一緒に解決するネットワーク、で「せんとくネット」です。ですから、洗濯物だけに限らず、物資を届けたり、話し相手になったりというような、そういったニーズを掘り起こしての支援活動を7月の末まで続けました。

下着などは洗濯ができないので使い捨てにしてしまうとか、ちょっと手洗いをして物干しに干すけれどもそれがなくなってしまう。残念なことですが女性たちが持ってってしまうのです。自分の下着も限られていますから、手元になくなれば、もう人のものだということは分かっているでもそれを拝借してしまうのです。そうしてなくなってしまう。あるいは物干し場に干すだけでも抵抗があるので、生乾きのまま身につけて

いるというような、そういう声がたくさん聞かれました。

★ニーズを掘り起こす

活動は仙台市内だけでなく、登米市、栗原市、気仙沼市、東松島市にもお見舞い訪問し、女性たちに向けた聞き取り調査をしました。その中で、運営責任者には男性が多く、みなさん大変熱心に取り組んでくださってはいるのですが、なかなか女性の声が届かないということがありました。

例えば設備では、仕切りがない、更衣室がない、授乳室がないというものです。非常時にそんなことを言うなとも言われましたが、この仕切りというのは本当に必要です。プライベート空間というのが全く確保されておりません。男女一緒に雑魚寝状態が1週間やそこらではなく、数カ月に及ぶのです。若い女性などは、寝返りを打ったら隣に全く知らない男性が寝ていてもう震え上がったと、泣きついてきたことがありました。また、女性たちの着替えは全部布団の中でした。そして、授乳をしなければいけないお母さんたちも、やはり公然と胸を出すことにもためらいがあり母乳をとめてしまったが、ミルクをあげようと思ったら今度はほ乳瓶がない。ミルクを溶かすお湯がない。津波で流されたということは何もなくなるということなのです。

★避難所の運営

女性たちにとってそのプライベートな空間が確保されないというのはきつかったです。ただ、それは一生懸命運営をしてくださっている男性たちになかなか言えないということもあります。そこで私たちがリーダーの方にご相談をいたしますと、仕切りを使うことによって不審者が入ってくると中で何か事件が起きたら困るとか、あるいは体調を崩す人ができてその発見が遅れたら困るとか、何よりもその避難所の中の一体感が損なわれるというようなことを理由として使わないのだということでした。それならば、必要な人には提供してあげてくださいというようなことは申し上げたのですが、やはり他の人が使っていないのに自分だけ使うということはできなくてどうしても声を上げられないということがありました。

それから、避難所での調理を担当するのは全部被災した女性たちでした。シフトを組んでいても何百人もの3食分です。朝5時、6時から調理室に入りますと夜の10時ぐらいまでは調理室から出られません。それが週に2回も3回も順番が回ってくるとことは女性たちにとっては大変負担でした。それも無償です。男性たちはいわゆるがれきの処理などで沿岸部などに出かけていきますとこれは有償なのですが、こうして避難所の中で調理をするのは無償なのです。

★女性リーダーの避難所では

中には幾つかの避難所ではありますけれども、女性たちがリーダーの方に掛け合って、更衣室を設置してもらったり、あるいは調理に関しては行政の方と相談をして、行政の方で調理の担当者を数人でしたが雇用して配置したりというようなことがありました。男性と女性のトイレも一体式になっているものから、できるだけ場所を離してもらったと。それでも、やはり多くは非常時ということで我慢をせざるを得ない現実があったことは確かです。

2003年に宮城県北部連続地震を経験した東松島市、それから2008年に岩手・宮城内陸地震があった栗原市では、今回の震災による被災者の受け入れや、地元の被災者の方たちに対して大変行き届いた配慮がなされた避難所運営が行われていたということです。

★さまざまな支援活動

それから、必要な物資。化粧品など女性ならではの物資というのがあります。これは一番男性たちからはひんしゅくを買ったものでして、ぜいたく品だとか、もっと必要なものがあるだろうというふうによく言われましたが、女性たちは大変喜んでくれました。やはり気持ちも変わるし、表情が変わるとというのがとても私たちにとっては嬉しい変化でもありました。

他にも、私たちは洗濯物を預かりながら、もう1つのサービスのズボンの丈詰めもしました。支援物資の中にはズボンもたくさんありますが、それも自分のサイズに合わないので丈詰めをしてほしいということで、100本以上自宅に持ち帰ってミシンで丈詰めをしてお持ちしました。

★女性の職場復帰

また避難所での女性たちの状況には社会的な課題がたくさん潜んでいます。幸い職場が無事だったため、生活の担い手である女性たちは避難所から仕事に通わなければいけませんでしたが。ガソリン不足や、車も流されてしまったという女性たちが、いろんな思いをしながらとにかく職場に通おうとしますが、保育所が被災して子どもを預けられない。あるいはお年寄りの介護やデイサービスにお願いをしていた介護施設も被災をしてしまったとなると、もうお手上げです。仕事に行くわけにいかず、休職はやがて退職に変わり、ハローワークに通っている女性たちもたくさんおりました。

また、子どもたちも不安定になります。避難所の中を走り回る、夜泣きをする。そのために周りの方に遠慮して、今度は車の中で生活をしたり、あるいは自宅も1階部分は流されてしまったが2階部分だけは残っているのでそこで暮らしたりいろいろなケースがありましたが、そこにはやはりどうしても女性たちが抱える困難がありました。

★避難所から仮設住宅へ

仮設住宅の中でも、もう既に地域コミュニティとしてどのような形で機能していくかということが大変大事な問題になってきます。仮設の中で引きこもる方や、あるいはアルコールに依存する男性なども増えてきておりますし、もちろんDVも発生しております。いろいろな形で目が行き届くような支援が必要になるわけです。

私たちは、女性のための語り合いサロンというのを仮設住宅の中にあります集会所で行っております。お茶を飲んだり、お菓子を食べたり、マッサージをしたり、手作りのものを作ったりしながら時間を共に過ごすというもので、特別改まったことをやっているわけではないのですが、そういう形で私たちが出向いていって一緒に時間を過ごすことで少しでも日常を取り戻すということ、それから、気持ちの回復につながればということで行っています。

★自立に向けた支援

避難所の場合には3食すべて、それから物資も無料で提供されていたわけですがけれども、仮設に入りますと、それ以降の生活は自分たちで賄っていかなければいけません。

そこで、自立に向けた支援として、仮設住宅の中で、農家と連携をして野菜や果物を実際にこの被災をした方々に買ってもらうという産直市を開催しました。また、仮設住宅の集会所で編み物や手仕事が好きな方たちがマフラーや手袋を作って、それを私たちがイベントのたびに持って行って買っていただくというような取り組みをしました。そうして少しずつ元気を取り戻してくださった方もいました。

また、地域の公共施設を会場に、子育て中のお母さんたちや、障害児を抱えたお母さん、それから行政の職員であるとか、支援に回った方たちを対象に、語り合いサロンを実施しました。やっぱりあの3月11日、子どもを背中に負ぶって、必死であの津波から逃げた経験であるとか、なかなか逃げてくれないおばあちゃんを引きずって避難所に連れて行ったとか、そういったお話がたくさん出てまいります。自分は家も家族も無事だったからこういう話をしてはいけないと、しない方がいいと思っていた方たちが、話すことによって少しずつ自分がそういった、どこか自分たちが無事だったこの後ろめたさみみたいなものがあってそこから自由になるということがあります。

★東日本大震災後の調査から

現在、震災と女性というテーマで調査を行っているところです。これは宮城県内の女性約1,500人の方々にご協力をいただきました。女性たちが今回の震災で抱えた困難の特徴的などころとしては、まず震災同居・家族離散によるストレスです。それから介護施設が被災したことで自宅介護の疲れから来るストレスもあります。

それから、仕事の面では仕事量が増えて負担が大きくなったというのがトップになっ

ています。働く女性たちにとって、介護の必要な両親、お年寄りの世話ができない、仕事が終わってスーパーへ行ってもすでに閉店している、ガソリンがないなどのストレスも大きかったようです。

復興計画に女性の視点を反映させるためにどのような内容を盛り込むべきかという項目では、障害のある人、妊産婦、病人、高齢者、子どもなどのニーズを踏まえたきめ細やかなサービス体制を整備するというものがトップです。そして、その次が女性の地域防災リーダーや災害復興アドバイザーを育成して、地域に住む人々の支援体制を実効性のあるものにする。これはまさに、困難を解決するためには女性がしっかりと声を上げていかなければいけないということを女性たちは実感したのだと思います。これをぜひ復興計画に盛り込んでもらいたいという女性たちの気持ちが、ここに集約されているのではないかと考えています。

★国の防災計画に女性の視点

2011年の12月、震災の発生直後に新たに見直された国の防災計画の中には、避難所運営や仮設住宅のコミュニティ運営への女性の参画、それから避難所における女性用物干し場や授乳室の設置、女性専用物資の女性による配布など、具体的な内容が盛り込まれています。これは驚くべきことです。やはり女性の声が届いた1つの成果だと思います。この女性専用物資の女性による配布というのはお分かりでしょうか。例えば生理用のナプキンなどを男性から被災女性たちが受け取るということに大変抵抗があるという声が上がっていたのです。例えばナプキンは袋包みになっていますよね。その袋から出して1つずつ渡されたということが、女性ならそういうことはあり得ないことです。そういったことが当たり前のように各避難所で行われてしまったのです。女性の視点というものがこの防災・災害復興には必要なのだということを国もしっかり認めて、そしてこうした計画の中に、あるいはさまざまな見直しの中に盛り込んでいるということなのだと思います。

★防災・災害復興の主体になるために

性別役割分業式を引きずって女性は防災や災害復興の主体にはなれません。リーダーは男性で、調理担当は女性でといった固定的な性別で役割を決める考え方から転換をしていかなければ、なかなか女性が主体にはなれません。

しかし、その防災・災害復興の専門家には圧倒的に男性が多く、私もいろいろな審議会に入っていますが、どれも女性委員の割合が16人中1人とか19人中2人でほとんど男性です。この女性の割合を増やすためには、女性たちも力をつけなければいけません。また、専門家だけで審議をするのではなく、生活者の視点を持った女性だけではなくもちろん男性も、自分たちが考えて防災とはこうあるべきという意見をしっかりと持って入っていくことも必要だと思います。

そして、復興に向けてということになれば、まちづくりの範ちゅうになります。女性の参画というのはとても大事です。地域の運営リーダーにも必ず女性が入っていてほしいと思います。女性の声を反映させることにつながります。

非常時だからといっていきなり男女共同参画を持ち出しても何の意味もありません。これは日常の中にこの男女共同参画の考え方というのが実現されていなければ、災害が起きたからといってもやはり男性にお任せになってしまいます。もちろん女性だけではなく、お年寄り、高齢者の方、障害を持った方、あるいは若者たち、そういった方たちもこの復興計画、復興過程にかかわってみんなの声が反映された復興計画ができあがっていかなければいけないというふうに思います。

★地域を知って防災訓練を

最後になりますけれども、ぜひご自分の地域を見直してみてください。沿岸部では津波、内陸部では地割れや火災などを想定した避難訓練というふうに、地域によって訓練は違うはずですが、それぞれ自分の地域はどういう地形になっているのか、どういう人たちが住んでいるのか、もう一度見てみると必要な訓練が浮かんできます。そしてそれを何回もやってください。朝も、昼間も、夜も。災害というのはいつ起きるか分かりません。今回の震災は、地域に男性がいない午後2時46分でした。

★避難所ワークショップ

では具体的に今、お勧めしているのが避難所づくりのワークショップです。例えば学校の体育館を借りて地域の人たちがそこに集まって避難所をつくってみるのです。学校の体育館というのは大変使い勝手が悪いです。だからといって行政に要望すれば片づくことではないです。実際に避難所として立ち上がった場合に、どんなふうに自分たちで工夫したらいいのかということも考えた方がいいです。きめ細かいところを地域の中でも皆さんで出し合って、どういう工夫をしていったらいいのかぜひ話し合ってください。自分たちで考えてみると、具体的な避難所のイメージというのが出てきます。避難所にはとどまりません。避難経路や危険箇所なども考えておく必要がありますね。地域の中のコミュニケーションというのはすごく大事です。別に干渉したり介入したりするものではなく、最小限の情報があればいいと思います。どこにどんな方が住んでいるのか。いざとなったらどういふ避難をすればいいのか。お互いに犠牲を出さずにみんなで協力し合って避難ができるのかということをやはり事前に考えて検討しておく方法として、避難所づくりはすごくいいと思っています。

そして、避難所を運営するのは基本的には行政ではない方がいいです。行政の限界というのを私たちは目の当たりにしました。避難所の立ち上げは行政ですが、ずっとそこに張りついて支援をする方たちの疲弊ぶりというのはとても大変なものでした。ですから、避難所というのは地域が運営すべきだというふうに思うのです。

★最後に

今、国の津波避難に関するワーキンググループの委員をしているのですが、最終的には完璧な避難方法はないのです。自分で逃げてくださいということしかないのです。車では避難しないでください。渋滞のためにいかに多くの方たちが車の中で犠牲になったか。

ぜひ自分の地域の中の避難経路、徒歩で避難できる秘密の場所をたくさん考えて、皆さんでその情報を共有しましょう。それはもう本当に明日から進めてもらいたいと思うのです。障害者やお年寄り、介護を受けている方、介護をしている方、子育てをしている方、こういう方たちこそ不安と心配はとても大きいはずなのですが、今の既存の訓練ではそういった方たちが参加できない訓練になっているのです。ですから、何回もやるうちの今回は子育て中の方たちを対象に、あるいはお年寄りを対象にと設定すると、それぞれが抱えている不安もどんどん出てきますし、それらの対処方法をお互いに知恵を絞り合うということもできると思います。

そのときにぜひ女性も主体になってください。ぜひリーダーとなってその地域の防災を考える主役になってもらいたいと思います。女性の方がきっとその子どもの状況、あるいはお年寄りの状況、病人の方の状況というのをよくお分かりになっていると思う。そういう方たちの声が十分に反映されるような、そういった防災訓練であったり計画であったり、それから避難訓練というものが行われればいいとは思っているところです。